

## 『元朝秘史』におけるアンダ概念～拙論の解題とその後の考察～

愛知淑徳大学 藤井 麻湖

一般に、『元朝秘史』（以下、秘史）におけるアンダ<sup>anda</sup>とは、同盟を結んだ勇者が互いに相手をアンダと位置づけることで成立するものであり、そのアンダ間の関係性は平和的で親密なものだと解されている。以前、発表者はこの語には、明示的意味とは真逆の意味を持つ非明示的意味が込められていることを示したことがある（2014年、※1）。具体的にいうと、アンダとは非明示的には「いずれ決着がつけられないといけないものの一時的に休戦関係を結んでいる勇者」のことを指しているということである。

秘史においては幾つかのアンダ関係が認められるが、その中でも、チンギス・ジャムカのようなアンダ関係とは異なり、マングト集団の勇者クイルダルとチンギス・カンのアンダ関係については明示的意味だけで理解されてきたため着目されてこなかったといえる。しかしながら、拙論においては両者の関係性にも上記の非明示的意味が認めれることを示しえた。非明示的な意味をもつクイルダルとチンギスの関係とは、端的に言えば隠れた敵対関係であり、こうした関係性を析出しえたことは予期されていなかったことだと思われるため画期的なことであったといえる。

本発表ではまず、秘史においてアンダという語が現われている全箇所を対象に考察したアンダについての拙論の要点をまとめ、拙論の紹介としたい。その上で、拙論のアンダ論に基づくと、民俗的観点から各種の文献資料を渉猟しながら考察された原山焯氏の論（1976年、※2）におけるクイルダルの葬送場所についての解釈は再検討に付す必要があることを指摘し、当該場所についての非明示的意味も提示してみたい。

※1 藤井真湖「『元朝秘史』における anda 概念～王罕―ジャムカーチンギスの非明示的な三者関係を基に」、『愛知淑徳大学現代社会研究科研究報告書』第10号、2014年

※2 原山焯「クイルダルの葬送―『モンゴル秘史』に見える一事件について」『史林』第37巻第3号、1976年